

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第26号 2019年3月

表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア

— フレーゲ的表象主義にもとづく考察 —

Perceptual Qualia and Aesthetic Qualia as Representational Properties

— An Inquiry Based on the Fregean Representationalism —

松崎 俊之 | MATSUZAKI Toshiyuki

# 表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア

## — フレーゲ的表象主義にもとづく考察 —

### Perceptual Qualia and Aesthetic Qualia as Representational Properties

#### — An Inquiry Based on the Fregean Representationalism —

松崎 俊之 | MATSUZAKI Toshiyuki

One of the controversial issues concerning qualia is whether qualia are representational properties or not. In this paper at the very least regarding the perceptual qualia and aesthetic ones I take a representationalist position which considers them representational properties. Nowadays the mainstream of qualia representationalism is a Russelian representationalism. While a Russelian representationalism has a merit that it enables to attribute immediately to the object the property which each quale represents, it contains a serious problem that the same experience of a quale could attribute a different property to the object. It is the Fregean representationalism that D. Chalmers anew advocates in order to circumvent the problem of Russelian representationalism. In this paper I will examine perceptual qualia and aesthetic ones based on the Fregean representationalism, and confirm that on the one hand the representational content of a perceptual quale is the property that usually causes perceptual experience of the quale in normal conditions, and on the other hand the representational content of an aesthetic quale is the manner in which a subject senses the perceptual quale concerned, i.e., a particular relational modality obtained between a subject and the perceptual quale.

#### Keywords:

知覚的クオリア、美的クオリア、フレーゲ的表象主義、美的特性、美的経験  
perceptual qualia, aesthetic qualia, Fregean representationalism, aesthetic properties, aesthetic experience

## 1. 序

津上英輔はその著『あじわいの構造—感性化時代の美学』（2010）において、味との比較をとおして「あじわい」について論じ、この「あじわい」をひとつのキー・コンセプトとしてさまざまな事象について美学的考察を繰り広げるのであるが、本稿では、この津上の議論をひとつの出発点としながらも、「味」と「あじわい」について、とくにそのクオリアとしての側面に注目し、前者を知覚的クオリア（すなわち知覚経験において問題となるクオリア）を指すメタファーとして、また後者を美的クオリア（すなわち美的経験において問題となるクオリア<sup>1)</sup>）を指すメタファーとして捉え返すことで、知覚的クオリアと美的クオリアとの関係について考察をおこなうことにしたい。

### (1) 「味」と「あじわい」に関する津上の理解の要点

津上は『あじわいの構造』において「あじわい」について以下のように述べる。

このような意味での感性的な性質を「あじわい」と名付けることにしよう。この語は味覚に関して、「味わう」という動詞の用法からも明らかになるように、一瞬でとらえられる「味」から出発しながらも、意識的に深めることができるという含みをもつ。（津上[2010]: 14、下線は松崎による。以下の引用においても同様）

津上は「感性的」という限定詞を「すぐれて感性を働かせること」として定義的に理解するのであるが（津上

[2010]: 13-4)、この点を踏まえるならば、この一節から「あじわい」とは「すぐれて感性を働かせる」ことによって、別言するならば、「味」の知覚(すなわち味覚)を「意識的に深める」ことによって始めて捉えることのできる性質であるということが明らかとなる<sup>2</sup>。あらためて言うまでもなく、ここで問題となるのは、「味」の知覚(味覚)を「意識的に深める」とは具体的にいかなる事態を指し示しているかという点である<sup>3</sup>。

## (2) クオリアとしての「味」と「あじわい」

この「あじわい」について津上はさらにつぎのように述べる。

「あじわい」は「あじわうこと」の意味で主体の働きを表わす一方、そうしてとらえられた感覚内容の意味で対象の性質も表わす。(津上[2010]:14)

この一節で津上は、「あじわい」が対象と経験主体との相互作用を介してはじめて成立するものであり、その意味で「あじわい」は主-客両義的な性格を帯びるものであることを指摘しているのであるが、ここではとくに「感覚内容の意味で対象の性質」という箇所注目しよう。この箇所では「感覚内容」と「対象の性質」(ある意味無造作に)並置されているのであるが、「感覚内容」が経験主体の心的状態の内実をなすのに対し、「対象の性質」とは、言うまでもなく、経験の(志向)対象の具える(客観的)性質を意味するものであることから、両者は本来経験の認識論的構制上の位置づけを異にするものであると言える。それにもかかわらず、「感覚内容」と「対象の性質」との両者をあえて並置するのは、それによって「あじわい」が主-客両義的な性格を帯びることを暗に示すためであろうと考えられる。

(恐らく津上自身は否定するであろうが)「あじわい」が「感覚内容」と「対象の性質」との二契機から構成されるものであるとするならば、「味」もまた、知覚(味覚)経験の認識論的構制に照らすならば、「感覚内容」と「対象の性質」との二契機から構成されるものと見なされることになる。前者の「感覚内容」が経験主体の心的状態の内実をなすものであり、また後者の「対象の性質」が経験の(志向)対象の具える(客観的)性質を意味するものであるとするならば、前者をクオリアと、また後者を対象の(客観的)特性([objective] property of object)と捉え返すことも可能と

なろう。

本稿では、こうした問題視角から、「あじわい」と「味」との両者をクオリアと対象の(客観的)特性との二つの契機から構成されるものと理解したうえで、とくに両者のもつクオリアとしての側面に注目し、「味」を知覚的クオリア一般のメタファーとして、また「あじわい」を美的クオリア一般のメタファーとして(またこれにともない「あじわう」を美的クオリアに関する感受作用のメタファーとして)捉えることにする。

その一方で、本稿においては、色彩のクオリア、より具体的には、赤のクオリアを知覚的クオリアの範例と位置づけ、また、対象のもつ「赤さ」と関連づけられる「あざやかさ」のクオリアを美的クオリアの範例と位置づけることにするが、こうした扱いは、知覚的特性と美的特性に関するアラン・H・ゴールドマンの理解から示唆を受けたものである。

ゴールドマンは『美学必携』(2009)のために寄稿した項目「美的特性」の冒頭で、美的特性をその類型にしたがって大きく八つに分類し、それぞれの類型に配される美的特性のリストを掲げるのであるが、そのなかの一類型「二階の知覚的特性(second-order perceptual properties)」に含まれる美的特性の例として彼は「(色や音について言われる)あざやかであること(being vivid)、または純粋であること(being pure)」を挙げる(Goldman [2009]:125f, cf. Goldman [1993]:32))<sup>4</sup>。ここから窺い知れる知覚的特性と美的特性に関する彼の理解を色彩を例に再構成して示すならば、対象のもつ色彩、たとえばその「赤さ」が知覚的特性であるのに対し、その「赤さ」のもつ「あざやかさ」が美的特性ということになる<sup>5</sup>。われわれはこうしたゴールドマンの理解を踏まえながらも、「赤さ」を知覚的クオリアとして、また「あざやかさ」を美的クオリアとして捉え返すことで、「赤さ」と「あざやかさ」を各クオリアの範例と位置づけることにする。

こうして本稿においては、「味」を知覚的クオリア一般のメタファーとして、また「あじわい」を美的クオリア一般のメタファーとして捉える一方で、「赤さ」を知覚的クオリアの範例として、また「あざやかさ」を美的クオリアの範例として位置づけたうえで議論を展開する次第である。



## 2. クオリアとは何か

知覚的クオリアと美的クオリアについて論ずるに先立ち、まずはクオリアとはそもそもいかなるものかという点について押さえておく必要がある。そこで本節では、Tye [2015]に依拠してクオリアに関する暫定的理解を呈示することで、以下の考察のための作業前提となる足場を固めておくことにする。

われわれは日々の経験をとおしてそれぞれその性格を異にするさまざまな心的状態に置かれることになるが、そこでは「ある心的状態に置かれるとは私にとってどのようなことか (what it is like for me to undergo a mental state)」が問題となる。哲学者達はしばしば、われわれの心的生活 (mental life) のもつ、内観によって接近可能な現象的アスペクトを指してこれを「クオリア (qualia<sup>6</sup>)」と呼ぶ。クオリアをこの広い意味で捉えたとするならば、クオリアが存在することを否定することは難しいと言える。今日クオリアは「心の哲学 (philosophy of mind)」の分野において活発な議論の対象となっているが、それはクオリアが心身問題、とりわけ意識の本性を考えるうえでひとつの重要なキー・コンセプトとなることに起因する (Tye [2015]: 1)。

タイはTye [2015]においてクオリアに関する四つの主要な理解を挙げるのであるが (Tye [2015]: 2-4)、以下ではそのタイの記述にしたがってそれらを順に見ておくことにしたい。

### [1] 第一の理解：現象的性格としてのクオリア

熟したトマトの赤い色を見る経験と若葉の薄緑色を見る経験とではまったく異なった (色彩) 経験であると言えるが、この違いはそれぞれの経験のもつ「現象的性格 (phenomenal character)」の違いに由来する。自己の経験のもつ現象的性格に注意を向けるならば、ある種の性質に気づくことになるが、経験のもつ現象的性格とは、ある経験をすることが主観的に見て (すなわち、その経験主観にとって) どのようなことか (what it is like subjectively to undergo the experience) を意味する。この第一の理解によれば、内観 (introspection) をとおして接近可能な (accessible)、経験のもつ現象的性格をかたちづくる性質が「クオリア」であるということになる。

以上の点を踏まえるならば、クオリアに関する第一の理解の要点として以下の二点が挙げられることになる。

①クオリアは経験の現象的性格をなす。

②クオリアは内観をとおして意識的に接近可能 (consciously accessible) である。

### [2] 第二の理解：センスデータの具える特性としてのクオリア<sup>7</sup>

センスデータとは、内的な非物理的像 (inner, non-physical picture) を意味するが、センスデータ理論によれば、ある対象、たとえば赤いトマトを見ると、われわれはトマトのもつ赤さの再現像であるような心的像 (a mental picture) の影響下にあることになる。こうした心的像がまさにセンスデータに他ならない。センスデータを内観することで、その表象内容 (すなわちそれが表象するトマトのもつ赤さという色彩特性) と内在的で非表象的な特徴 (intrinsic, non-representational features) (たとえばトマトのもつ赤さという色彩特性の心的対応物 [mental counterparts]) とが明らかになる。センスデータ理論によれば、クオリアはセンスデータ (あるいは他の非物理的、現象の対象) のもつ内在的で、意識的に接近可能 (consciously accessible)、非表象的諸特徴であり<sup>8</sup>、これが唯一経験のもつ現象的性格 (すなわち「私がある経験をもつとはどのようなことか」) の規定根拠 (determinants) になりうるものとされる。

以上の点を踏まえるならば、クオリアに関する第二の理解の要点として以下の六点が挙げられることになる。

①クオリアはセンスデータのもつ特性である。

②クオリアは内観をとおして意識的に接近可能である。

③クオリアは経験に内在する (intrinsic)。

④クオリアは非表象的である (経験の表象内容は同一のままにクオリアは変化しうる)。

⑤クオリアは対象の具える知覚的特性に対する心的対応物である。

⑥クオリアが唯一経験のもつ現象的性格の規定根拠となりうる。

### [3] 第三の理解：内在的、非表象的特性としてのクオリア

クオリアに関するこの第三の理解は、クオリアを内在的で、非表象的で、意識的に接近可能な特徴と見なすとともに、唯一こうしたクオリアが経験のもつ現象的性格の規定根拠になると見なす点で、クオリアをセンスデータとして捉える第二の理解と共通するが、この第三の理解はセンスデータ理論を前提としない点で第二の理解から区別される。視覚経験を例に取るならば、この第三の理解のもとでクオリアは、(a) 視覚経験に内在する特徴であり、(b) 内観によって接近可能であり、(c) 経験の表象内容が同一のまま変化しうるものであり、(d) 対象の直接に目に見える特性 (たとえば「赤



さ」という色彩特性)の心的対応物であり、(e)経験のもつ現象的性格の唯一の規定根拠をなすものと見なされる。因みに言えば、クオリアに関するこの第三の理解が今日哲学者たちの間でもっとも一般的な理解となっている(see Nagel [1974], Peacocke [1983] and Block [1990])。

以上の点を踏まえるならば、クオリアに関する第三の理解の要点として以下の五点が挙げられることになる。

- ①クオリアは内観をとおして意識的に接近可能である。
- ②クオリアは経験に内在する。
- ③クオリアは非表象的である(経験の表象内容は同一のままにクオリアは変化しうる)。
- ④クオリアは対象の具える知覚的特性に対する心的対応物である。
- ⑤クオリアが唯一経験のもつ現象的性格の規定根拠となりうる。

[4] 第四の理解：内在的、非物理的で言語化不可能な特性としてのクオリア

いわゆる「クオリア消去主義(eliminativism about qualia)」を採るデネット(Dennett [1988], Dennett [1991])に代表されるような一部の哲学者は、「クオリア」という用語をより限定的な仕方を用い、それを経験のもつ内在的、非物理的で言語化不可能(ineffable)な特性であり、その経験主体に対して修正不可能な仕方で(incorrigibly)与えられる(すなわち、錯誤の可能性をもたない)ものと見なす。

以上の点を踏まえるならば、クオリアに関するこの第四の理解の要点として以下の四点が挙げられることになる。

- ①クオリアは経験に内在する。
- ②クオリアは非物理的である。
- ③クオリアは言語化不可能(ineffable)である。
- ④クオリアは不可謬な仕方で(incorrigibly)経験主体に与えられる。

\* \* \*

以上見てきたクオリアに関する四種の理解のうち第一の理解がクオリアに関する基本的かつ標準的な理解、別言するならば、その最大公約数的な理解であると見なされることから、本稿ではクオリアをまずはこの第一の理解のもとに捉えたうえで議論を開始することにしたい。

### 3. 表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア

クオリアをめぐる論争点のひとつに現象的性質としてのクオリアは志向性をもつか否か、換言するならば、クオリアは何らかの対象を表象するか否か(クオリアは表象的特性かあるいは内在的特性か)という点が挙げられるが、この問いに対して「然り」と答えるのがクオリア表象主義であるのに対し、「否」と答えるのがクオリア非表象主義であると、まずは大きく二分して捉えることができる(因みに、本稿第2章に挙げたクオリアに関する四種の理解に即して言うならば、そのうち第二と第三の理解は明らかにクオリア非表象主義に分類される)<sup>9</sup>。本稿では、少なくとも知覚的クオリアと美的クオリアに関しては、両者はいずれも志向性を具える、すなわち何らかの対象を表象する表象的特性であると見なすことにするが<sup>10</sup>、この点について以下では、チャーマーズがその論考「経験の表象的性格」(2004, Chalmers [2010a])において提唱する「フレーゲの表象主義(Fregean representationalism)」に依拠して考察をおこなうことにしたい。

#### (1) クオリア表象主義

チャーマーズの提唱する「フレーゲの表象主義」を理解するには、ここで言われる「表象主義」とはそもそもいかなる立場なのか、まずはその点について押さえておく必要がある。

チャーマーズは「表象主義」一般のテーゼとして以下のものを挙げる。

【TR】表象主義のテーゼ：現象的特性(phenomenal properties)は何らかの表象的特性(certain representational properties)と等価(equivalent)である<sup>11</sup>(Chalmers [2010a]: 342, cf. Chalmers [2010a]: 370)<sup>12</sup>。

このテーゼにおいては、現象的特性と表象的特性との等価性が主張されているのであるが、要するにこの主張は、現象的特性は何らかの対象を表象するということを意味する。

さてこのテーゼに関して、そこに現れる「表象的特性」と「現象的特性」についてさらに補足的説明を加えておこなえば、以下ようになる。

まず「表象的特性」についてであるが、チャーマーズによれば「表象的特性」とは「何らかの志向内容(intentional content)を表象する特性(もしくは何らかの志向内容をもつ特性)」ということになるが<sup>13</sup>、ここでとくに注意しなければ



ならないのは、志向内容は世界の状態によって充足される場合もあれば充足されない場合もある、一種の充足条件 (conditions of satisfaction) をもつという点である (Chalmers [2010a]: 341-2)。因みに、この表象的特性は、経験主体もしくは経験主体のもつ心的状態によって例化される (instantiated) ことになる (Chalmers [2010a]: 342)。

ついで「現象的特性」についてであるが、「現象的特性」に関するチャーマーズの説明的記述 (Chalmers [2010a]: 341) から判断するならば、チャーマーズの言う「現象的特性」はクオリアと基本的に同義のものと見なすことができる (さらに特定化するならば、本稿第2章に挙げたクオリアに関する四種の理解のうちその第一の理解に直接対応するものであると言える。see Chalmers [2010]: 5-6, 104.n.2)。したがって、先に示した「表象主義のテーゼ」にある「現象的特性」を「クオリア」に置き換えることで、クオリア表象主義のテーゼが得られることになる。

【TRQ】クオリア表象主義のテーゼ：クオリアは何らかの表象的特性と等価である<sup>14</sup>。

## (2) ラッセル的表象主義

表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアについて論ずるにあたってわれわれが依拠する「フレーゲ的表象主義」もまたそれが表象主義の一種であるかぎりにおいて、大きくはこれを上に示した表象主義のテーゼのもとに捉えることができるのであるが、「フレーゲ的表象主義」と並んでこの表象主義の一種に数えられるものに「ラッセル的表象主義」がある。「フレーゲ的表象主義」は「ラッセル的表象主義」との対比においてはじめてその基本性格が明らかとなるものであり、加えて今日表象主義の立場を採る論者の大半が「ラッセル的表象主義者」であると言えることから<sup>15</sup> (Chalmers [2010a]: 356)、「フレーゲ的表象主義」について論ずるに先立ち、まずは「ラッセル的表象主義」の基本的理論構制を押さえるとともに、この「ラッセル的表象主義」のもとで表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアはいかに理解されるかという点について確認しておくことにしたい。

心的状態の内容 (あらためて言うまでもなく、現象的特性はこの「心的状態の内容」のひとつに数えられる) を性格づけるひとつの自然な方法は、それを世界の内にある対象

と特性に関連づけることであると言えるが、チャーマーズは、世界の内にある或る特定の対象と特性からなる複合体、もしくは或る特定の特性それ自体を指して、これを「ラッセル的 (表象) 内容 (Russellian contents)」と名づける (Chalmers [2010a]: 356)。他方で、チャーマーズによれば、何らかのラッセル的 (表象) 内容を表象する特性が「ラッセル的表象的特性 (Russellian representational property)」ということになる (Chalmers [2010a]: 356)。

以上の点を踏まえるならば、本章第1節に示した表象主義一般のテーゼ【TR】を基盤として、【TR】にある「何らかの表象的特性」を特定化するかたちで、これを「ラッセル的表象的特性」に置き換えることで「ラッセル的表象主義」のテーゼ【TRR】が得られることになる。

【TRR】ラッセル的表象主義のテーゼ：現象的特性は、世界の内にある或る特定の対象と特性からなる複合体、もしくは或る特定の特性を意味する「ラッセル的 (表象) 内容」を表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である (Chalmers [2010a]: 356)<sup>16</sup>。

本章第1節にも述べたように、チャーマーズの言う「現象的特性」はクオリアと基本的に同義のものと見なされることから、ラッセル的表象主義のテーゼ【TRR】からただちにラッセル的クオリア表象主義のテーゼ【TRRQ】が導き出されることになる。

【TRRQ】ラッセル的クオリア表象主義のテーゼ：クオリアは、世界の内にある或る特定の対象と特性からなる複合体、もしくは或る特定の特性<sup>17</sup>を意味する「ラッセル的 (表象) 内容」を表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である。

さてここであらためて問題となるのは、このラッセル的クオリア表象主義のもとで知覚的クオリアと美的クオリアに関して具体的にはいかなる理解が示されるかという点である。この点に関して知覚的クオリアと美的クオリアのそれぞれについてその要点を確認しておくならば以下のようになる。

### [1] 知覚的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義

知覚的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義について論ずるにあたり、ここで最初に押さえておく必要があるのは、知覚的クオリアのラッセル的 (表象) 内容であるが、知覚的クオリアのラッセル的 (表象) 内容は (対象のもつ) 知覚的特性であるということになる。したがって、「赤」のクオリアという知覚的クオリアを例に言うならば、「赤」のクオリアのラッセル的 (表象) 内容は (たとえばトマトといった対象のも



つ)「赤さ」という色彩(知覚的)特性ということになる。

知覚的クオリアのもつラッセル的表象的特性は、知覚的クオリアのラッセル的(表象)内容からただちに導き出され、それは(対象のもつ)知覚的特性を表象する特性ということになる。したがって、「赤」のクオリアを例に言うならば、「赤」のクオリアの具えるラッセル的表象的特性は、(たとえばトマトといった対象のもつ)「赤さ」という色彩(知覚的)特性を表象する特性ということになる。

以上の点を踏まえて知覚的クオリアに関するラッセル的表象主義のテーゼを示したものが以下の【TRRPQ】である。

【TRRPQ】知覚的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義のテーゼ：知覚的クオリアは(対象のもつ)知覚的特性を表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である。

この【TRRPQ】をたとえば「赤」のクオリアを例に捉え返すならば、「赤」のクオリアは(たとえばトマトといった対象のもつ)「赤さ」という色彩知覚的特性を表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である」といったものとなる。

因みに、知覚的クオリアは(対象のもつ)知覚的特性を表象することをとおして、その知覚的特性を対象に帰属させることになるが、このことを「赤」のクオリアを例に述べるならば、「赤」のクオリアは「赤さ」という色彩(知覚的)特性を表象することをとおして、この「赤さ」という色彩(知覚的)特性をたとえばトマトといった対象に帰属させるということになる。

## [2] 美的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義

ついで美的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義に関して述べるならば、美的クオリアのラッセル的(表象)内容は(対象のもつ)美的特性であり、また美的クオリアのもつラッセル的表象的特性は(対象のもつ)美的特性を表象する特性ということになる。この点に関して、「あざやかさ」という美的クオリアを例に述べるならば、「あざやかさ」のクオリアのラッセル的(表象)内容は(対象のもつ)「あざやかさ」という美的特性であり、そのラッセル的表象的特性は(対象のもつ)「あざやかさ」という美的特性を表象する特性ということになる。

以上の点を踏まえて美的クオリアに関するラッセル的表象主義のテーゼを示したものが以下の【TRRAQ】である。  
【TRRAQ】美的クオリアに関するラッセル的クオリア表象主義のテーゼ：美的クオリアは(対象のもつ)美的特性を

表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である。

この【TRRAQ】をたとえば「あざやかさ」という美的クオリアを例に捉え返すならば、「あざやかさ」のクオリアは(たとえばトマトといった対象のもつ)「あざやかさ」という美的特性を表象する特性であるラッセル的表象的特性と等価である」といったものとなる。

因みに、美的クオリアは(対象のもつ)美的特性を表象することをとおして、その美的特性を対象に帰属させることになるが、このことを「あざやかさ」のクオリアを例に述べるならば、「あざやかさ」のクオリアは「あざやかさ」という美的特性を表象することをとおして、この「あざやかさ」という美的特性をたとえばトマトといった対象に帰属させるということになる<sup>18</sup>。

さてこのラッセル的クオリア表象主義は、上にも見たように、それによるならば知覚的クオリアと美的クオリアという二種のクオリアがそれぞれ表象する特性を対象に直接的に帰属することが可能になるという点で一定の長所をもつと見なされるが、その一方で、チャーマーズも指摘するように(Chalmers [2010a]: 361)、そこには実は深刻な理論的問題が蔵されている。

ラッセル的表象主義の蔵する問題について、Chalmers [2010a]における記述に即して色彩経験を例に論ずるならば、以下ようになる。

以下の三つの命題は、それぞれ別個に捉えるならば、そのいずれもが色彩に関しておおむね妥当な命題と見なされる。

- ①色彩経験は色彩を対象に帰属させる(attribute)。
- ②色彩は内在的な(intrinsic)特性である。
- ③色彩に関して(relevantly)異なる内在的特性をもった対象について(それぞれ異なった[経験]主体において)現象的に同一の真なる色彩経験(veridical phenomenally identical color experiences)が存在しうる。

各命題について若干の補足説明を付しておくならば、以下ようになる。

ad①この命題を「赤」のクオリア経験をもとに捉え返すならば、「赤」のクオリア経験は(物理的赤という)色彩(知覚的)特性をたとえばトマトという対象へと帰属させることになるが、この「赤」のクオリア経験は必然的に、その対象が当該クオリア経験によって帰属される(物理的赤という)色彩(知覚的)特性を例化するならば、その場合にかぎり真であるということになる(see Chalmers [2010b]: 388)。



ad②この命題によれば、たとえば「赤さ」という色彩(知覚的)特性は(たとえばトマトという)対象に内在する内在的な特性である、逆に言うならば、「赤さ」という色彩(知覚的)特性は関係的特性(relational properties)やその下位種としての傾性的特性(dispositional properties)ではないということになる。こうした内在的特性の候補としてもっとも蓋然性の高いものに、物体表面のもつある特定の分光反射特性といった内在的物理的特性がある(因みにチャーマーズは、たとえば赤の現象的経験によって帰属されるこうした内在的物理的特性を指して「物理的赤(physical red)」と呼ぶ。Chalmers [2010b]:390, see also Chalmers [2010a]:358)。

ad③この命題が伝えようとしている事態を具体例をもとに敷衍するならば、以下ようになる。すなわち、いま仮に物理的赤と物理的緑というそれぞれ異なった内在的特性をもつ二つの対象 $\alpha$ と $\beta$ があるとして、経験主体Aは物理的赤を具えた対象 $\alpha$ を見ることによって赤のクオリア経験を得るのに対し、経験主体Bは物理的緑を具えた対象 $\beta$ を見ることによって同じ赤のクオリア経験を得るにもかかわらず、A、B両者のクオリア経験はいずれも真と見なされることになるのである。

上記のように①から③の命題は、個々に捉えるかぎり、そのいずれもが色彩に関しておおむね妥当な命題と見なされるのであるが、その一方で、①から③の命題を前提とすることで、そこから以下の④の命題が導出されることになる。

④現象的に同一の真なる色彩経験が対象に異なった内在的特性を帰属しうる。

この④の命題は要するに、同一の真なる経験が世界の異なった状態を表象するということを意味し、ここに表象主義を根柢から覆しかねない背理が生ずることになる。

以上の点について、赤のクオリア経験をもとにより具体的に説明するならば、以下ようになる。

赤のクオリア経験を引き起こす(たとえばトマトのような)対象に対して、内在的特性としての物理的赤という色彩特性を帰属させるとき、その対象が実際に物理的赤を具えているとするならば、そのクオリア経験は真となる。それに対して、その住民が現実世界の住民であるわれわれとは異なった色覚システムをもつことにより、物理的緑を具えた対象が赤のクオリア経験を引き起こすような可能世界を考えてみるならば、そうした可能世界においては、赤のクオリア経験が対象に対して物理的緑という色彩特性を帰属させるとき、

そのクオリア経験は真となる。物理的赤を具えた対象が赤のクオリア経験を引き起こす現実世界と物理的緑を具えた対象が赤のクオリア経験を引き起こす可能世界との両者をもとに考えるならば、一方が物理的赤を具え他方が物理的緑を具えるといったように、それぞれ異なった内在的特性を具えた二つの対象に対していずれも真である同じ赤のクオリア経験が存在しうるということになる。すなわち現実世界においては、赤のクオリア経験が対象に物理的赤という特性を帰属させるのに対し、ここで想定された可能世界においては、同じ赤のクオリア経験が対象に物理的緑という、物理的赤とは異なった特性を帰属させることになるのである。

こうした事態を一般化したものが④の命題「現象的に同一の真なる色彩経験が対象に異なった内在的特性を帰属しうる」に他ならないが、この④の命題は、「現象的に同一の色彩経験は対象に同じ特性を帰属させる」という、ラッセル的表象主義を可能とする基本的制約(Chalmers [2010b]: 387. これをそのまま表象主義一般を可能とする基本的制約として受け取ることもできよう)に真っ向から対立することになり、仮に④の命題を受け入れるとするならば、ラッセル的表象主義はその理論的妥当性を失うことになる。これがまさにラッセル的表象主義の蔵する問題に他ならない<sup>19</sup>, <sup>20</sup>。ラッセル的クオリア表象主義が必然的に蔵するこうした問題を回避するためのひとつの方途としてチャーマーズがあらたに提案するものが以下に見るフレーゲ的表象主義であると言える<sup>21</sup>。

### (3) フレーゲ的表象主義

ついでここでは、表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアについて考察するにあたってわれわれが依拠するフレーゲ的表象主義を取り上げることにするが、フレーゲ的表象主義について論ずるのに先立ち、まずは表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアについて考察するにあたってなぜラッセル的表象主義ではなくフレーゲ的表象主義をその理論的基盤として採用するのか、その理由を述べておくことにしたい。

ラッセル的表象主義ではなくフレーゲ的表象主義を採用する主たる理由としては、以下の三点が挙げられる。

(1)本章第2節に見たように、ラッセル的表象主義がその立場を根柢から覆しかねない深刻な問題を蔵するのに対し、フレーゲ的表象主義によるならばそうした問題を回避する



ことができる(Chalmers [2010a]: 366-7)]<sup>22</sup>。

(2)たとえばラッセル的表象主義のひとつに数えられる物理主義的ラッセル的表象主義(physical Russellian representationalism)が、ラッセル的(表象)内容としての知覚的特性を物理的特性と同一視する点で、現象的特性(e.g. 赤のクオリア)を物理的特性、すなわち物体表面のもつ分光反射特性に還元する物理的還元主義(physical representationalism)であることから明らかに、ある種のラッセル的表象主義は還元的表象主義(reductive representationalism)であるのに対し(Chalmers [2010a]: 357)、フレーゲ的表象主義は本質的に非還元的表象主義(nonreductive representationalism)であると見なされる(この点については後段であらためて確認する)<sup>23</sup>。

(3)本章第2節に見たように、ラッセル的表象主義によるならば、知覚的クオリアが(対象のもつ)知覚的特性を表象することをとおしてその知覚的特性を対象に帰属させるのに対し、美的クオリアは(対象のもつ)美的特性を表象することをとおしてその美的特性を対象に帰属させるといったように、ラッセル的表象主義のもとでは知覚的クオリアと知覚的特性、美的クオリアと美的特性との関係は個々別々に取り扱われるにとどまるため、四者相互の関係については(少なくとも直接的には)これを論ずる手立てを欠くことになる。それに対して、フレーゲ的表象主義に依拠するならば、美的クオリアを知覚的クオリアおよび美的特性との関係において明確に位置づけることが可能となり、そうした関係性において美的クオリアの表象的特性としての在り方を解明する途が拓け、それによって延いては、知覚的特性と美的特性のみならず、知覚的クオリアと美的クオリアをも射程に収めた包括的な美的経験理論の構築が可能となる(まさにその意味で、少なくとも美学的観点からするならば、この点がラッセル的表象主義ではなくフレーゲ的表象主義を採用するもっとも重要な理由となる)。

表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアを解明するにあたって、フレーゲ的表象主義はラッセル的表象主義に比べ以上のような長所を有すると見なされるのであるが、それではフレーゲ的表象主義とはそもそもいかなる立場なのだろうか、以下ではまずはフレーゲ的表象主義の基本的理論構制を押さえておくことにしたい。

周知のとおりフレーゲはその論考「SinnとBedeutungについて」(1892)において、記号(Zeichen)のBedeutungとSinnとを峻別し、前者を記号によって指示されるもの(das

Bezeichnete)と、また後者を記号によって指示されるものの与えられ方(die Art des Gegebenseins des Bezeichneten)と理解するのであるが(Frege [1892]: 26)、チャーマーズによれば、BedeutungとSinnに関するフレーゲのこうした理解は、たとえば「赤さ」といった色彩知覚的特性を指し示す記号表現(すなわち語)にまで拡張可能であり、したがってこの「赤さ」という語の指示対象(referent、すなわちフレーゲの言うBedeutung)は「赤さ」という色彩知覚的特性として、またそのSinn(sense)はこの「赤さ」という色彩知覚的特性の呈示の様態(mode of presentation、これはフレーゲの言う「与えられ方(die Art des Gegebenseins)」に直接対応する)として捉えられることになる(Chalmers [2010a]: 361)。

チャーマーズによれば、呈示の様態を捉えるためのひとつの自然なアプローチは、これを概念の外延に課された条件と解するものである<sup>24</sup>。すなわちすべての概念は、世界における存在者が概念の外延としての資格を得るにはそれを満たさなければならないような条件と結びつけられているのである(Chalmers [2010a]: 362)。

チャーマーズは、概念の呈示様態を概念のフレーゲ的内容と捉えるのであるが、彼によれば、呈示様態に関するこうした理解は、知覚的経験の内容に関するアプローチにも拡張可能である。すなわち、知覚的経験は知覚的特性の呈示の様態に関わるものであり、その呈示の様態は、外延に課される条件として、知覚的特性が自己の経験をとおして対象に帰属されるために満たさなければならない条件をなすのである(Chalmers [2010a]: 363)。

こうした条件をなす、知覚的特性の呈示の様態を具体的に示すならば、それは「通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性」ということになり、これが知覚的経験のフレーゲ的(表象)内容となる(Chalmers [2010a]: 363)。このことを「赤」のクオリア感受という現象的経験を例に述べるならば、「赤さ」という色彩知覚的特性の呈示の様態は、「通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では赤のクオリア経験を引き起こす特性」ということになり、これが「赤」のクオリアのフレーゲ的(表象)内容となる。

知覚的特性の呈示の様態が知覚的経験、本稿における論脈において捉え返せば、知覚的クオリア経験のフレーゲ的(表象)内容となることから、知覚的クオリアの具えるフレーゲ的表象的特性は、「対象に帰属される知覚的特性



を規定するための条件をなす、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態である、通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性を表象する特性」ということになる(Chalmers [2010a]: 363)。

以上の議論を踏まえ、フレーゲ的表象主義に関する一連のテーゼを定式化して示すならば以下になる。

まずフレーゲ的表象主義一般に関するテーゼについてであるが、そのテーゼは本章第1節に示した表象主義一般のテーゼ【TR】を基盤として、【TR】にある「何らかの表象的特性」を特定化するかたちでそれを「フレーゲ的表象的特性」に置き換えることで得られる。

【TFR】フレーゲ的表象主義のテーゼ：現象的特性はフレーゲ的表象的特性と等価である。

本章第1節で確認したとおり、チャーマーズの言う「現象的特性」はクオリアと基本的に同義のものと見なされることから、フレーゲ的クオリア表象主義のテーゼはフレーゲ的表象主義のテーゼ【TFR】からただちに導き出されることになる。

【TFRQ】フレーゲ的クオリア表象主義のテーゼ：クオリアはフレーゲ的表象的特性と等価である。

以上の議論を踏まえ、ついで知覚的クオリアと美的クオリアのそれぞれについてフレーゲ的クオリア表象主義のテーゼの定式化を試みるならば、以下になる。

#### [1] 知覚的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義

まず知覚的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義について述べるならば、そのテーゼは、フレーゲ的クオリア表象主義のテーゼ【TFRQ】にある「フレーゲ的表象的特性」を、先に見た知覚的クオリアのフレーゲ的(表象)内容をもとに特定化することで得られる。

【TFRPQ】知覚的クオリアに関するフレーゲ的表象主義のテーゼ：知覚的クオリアは、対象に帰属される知覚的特性を規定するための条件をなす、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態である、通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性を表象する特性であるフレーゲ的表象的特性と等価である。

この【TFRPQ】を「赤」のクオリアを例に捉え返すならば、「赤」のクオリアは、(たとえばトマトといった)対象に帰属される色彩知覚的特性を規定するための条件をなす、「赤」のクオリアによる「赤さ」の色彩知覚特性の呈示様態であ

る、通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では「赤」のクオリア経験を引き起こす特性を表象する特性であるフレーゲ的表象的特性と等価である」といったものとなる。

#### [2] 美的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義

ついで取り上げなければならないのは、美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義ということになるが、ここでまず最初に確認しておく必要があるのは、美的クオリアは、ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態を現象的な仕方では表示するものと見なされるという点である。このことを「あざやかさ」という美的クオリアに即して述べるならば、「あざやかさ」という美的クオリアは、「赤」のクオリアをその経験主体が「あざやかさ」という様態で感受するという、経験主体と「赤」のクオリアとの間に認められるある特定の関係様態を現象的な仕方では表示するということになる。

以上の点を踏まえるならば、美的クオリアのフレーゲ的(表象)内容、すなわち対象に帰属される美的特性を規定するための条件をなす、美的クオリアによる美的特性の呈示様態は、「ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態」であると言える<sup>25</sup>。

一方、美的クオリアのフレーゲ的表象的特性は上記のフレーゲ的(表象)内容から容易に導き出されることになるが、それは「ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態を表象する特性」ということになる。

以上の点を踏まえて、美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義のテーゼを示したものが以下の【TFRAQ】である。

【TFRAQ】美的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義のテーゼ：美的クオリアは、対象に帰属される美的特性を規定するための条件をなす、美的クオリアによる美的特性の呈示様態である、或る知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態を表象する特性であるフレーゲ的表象的特性と等価である<sup>26</sup>。

いま試みに、この【TFRAQ】をたとえば「あざやかさ」という美的クオリアをもとに捉え返してみるならば、「あざやかさ」という美的クオリアは、対象に帰属される「あざやかさ」



という美的特性を規定するための条件をなす、「あざやかさ」という美的クオリアによる「あざやかさ」という美的特性の呈示様態である、「赤」のクオリアをその経験主体が「あざやかさ」として感受するという、経験主体と「赤」のクオリアとの間に認められるある特定の関係様態を表象する特性である、フレーゲ的表象的特性と等価である」<sup>27</sup>といったものとなる。

以上フレーゲ的表象主義のもとで知覚的クオリアと美的クオリアとはいかに理解されるかという点について、それぞれのテーゼの定式化をとおして見てきたのであるが、この点に関して以下の四つの補足説明を付しておくことにしたい。

#### [1] 非還元的表象主義としてのフレーゲ的表象主義

チャーマーズによれば、表象主義一般は「還元的表象主義(reductive representationalism)」と「非還元的表象主義(nonreductive representationalism)」に大きく二分されることになるが、前者にあつては、現象的概念(phenomenal notions)<sup>28</sup>に訴えることなく、現象的特性は何らかの表象的特性と等価であると見なされるのに対し、後者にあつては、現象的特性は何らかの表象的特性と等価であるとされるが、その表象的特性は現象的概念に訴えることなくしては理解しえないと見なされる(Chalmers [2010a]: 350)。

上に見たように、フレーゲ的表象主義のもとで現象的特性と等価とされる表象的特性は、「対象に帰属される知覚的特性を規定するための条件をなす、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態である、通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性を表象する特性」であり、そこではフレーゲ的(表象)内容をなす「通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性」を特定化するために現象的概念(「当該の現象的経験」)が用いられることから、フレーゲ的表象主義は紛れもなく非還元的表象主義であると言える(see Chalmers [2010a]: 366)。

それが非還元的表象主義であるという点では、知覚的クオリアおよび美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義も同断であると言えるが、この点について知覚的クオリアに関するフレーゲ的表象主義と美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義について個々に確認しておくならば、以下のようになる。

まず知覚的クオリアについて言うならば、知覚的クオリア

に関するフレーゲ的表象主義のテーゼ【TFRPQ】からも明らかのように、そこで問題となるフレーゲ的(表象)内容は、(ある意味当然ながら)フレーゲ的表象主義一般のフレーゲ的(表象)内容と同じ「通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では当該の現象的経験を引き起こす特性」であり、上述のように、ここでは紛れもなくその(表象)内容を特定化するために現象的概念(「当該の現象的経験」)が用いられていることから、知覚的クオリアに関するフレーゲ的表象主義は非還元的表象主義であると見なされる。

一方美的クオリアについて言うならば、美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義のテーゼ【TFRAQ】からも明らかのように、そこで問題となるフレーゲ的(表象)内容は「或る知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態」であり、ここでもまたその(表象)内容を特定化するために「知覚的クオリアの感受(内容)」という現象的概念が用いられていることから、美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義もまた非還元的表象主義であると見なされることになる。

#### [2] 【TFRAQ】に関する副詞説的理解

知覚の副詞説(adverbial theory of perception)によれば<sup>29</sup>、たとえば以下の(a)の命題が示す事態は、知覚経験自体の副詞的変容として捉え返されることで、(b)のように翻訳される(see Crane and Craig [2015]: 25)。

(a)経験主体Sは何か赤いもの(something red)を知覚する。

(b)経験主体Sは赤く(redly)知覚する。

【TFRAQ】のなかの「或る知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態」という箇所は、「経験主体Sがある知覚的クオリアpQをある様態xのもとに感受する」(e.g.「経験主体Sは「赤」のクオリアを「あざやかさ」という様態のもとに〔「あざやかさ」として〕感受する」)という事態を指し示していると思なされるが、こうした事態を上はその骨子を示した知覚の副詞説的理解のもとに捉え返すとするならば、それは「経験主体Sは知覚的クオリアpQをx的に感受する」と定式化されることになる(e.g.「Sは「赤」のクオリアを「あざやか」的に感受する」)。

「経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態」をこのように知覚の副詞説のもとに理解するならば、そこから以下の二点が帰結することになる。



① 「経験主体Sは知覚的クオリアpQをx的に感受する」という定式によるならば、「経験主体Sがある知覚的クオリアpQをある様態xのもとに感受する」という事態は、経験主体Sと知覚的クオリアpQからなるある種の二項関係、すなわち経験主体Sと知覚的クオリアpQとの間に成立する、前者が後者を「x的に感受する」関係として捉え返すことが可能となる（この関係を記号表現するならばadv.s.R(S,pQ)となる。なお、「adv.s.R」は「副詞的な感受関係(adverbially sensing relation)」を、「S」は経験主体を、「pQ」は知覚的クオリアをそれぞれ表わす）。

② 上に見たように、知覚の副詞説によれば、たとえば「経験主体Sは何か赤いものを知覚する」という事態は「経験主体Sは赤く知覚する」という事態として理解されることになるが、こうした理解をとおして知覚の副詞説は、センスデータ説とは異なり、センスデータ（上記の「経験主体Sは何か赤いものを知覚する」という命題における「何か赤いもの」をセンスデータとして捉えることも可能である）のような怪しげな心的対象に存在論的にコミットすることを避けることができる（see Crane and Craig [2015]: 25, フィッシュ [2014]: 52-3）。この点については、「経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態」に関する副詞説的理解に関しても同断であり、この関係様態を「経験主体Sは知覚的クオリアpQをx的に感受する」という定式のもとに捉え返すことによって、その実体化（すなわち、それをある種の存在者として定立すること）を回避することができる。より具体的に述べるならば、「経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態」のひとつの例となる「経験主体Sが「赤」のクオリアを「あざやかさ」という様態のもとに（「あざやかさ」として）感受する」という事態が、副詞説的理解のもとで「経験主体Sは「赤」のクオリアを「あざやか」的に感受する」という事態として捉え返されることによって、「あざやかさ」に対する存在論的コミットメントが回避され、それによってこの「あざやかさ」を実体化しないで済ますことができるのである。

### [3] 美的クオリア、知覚的クオリア、経験主体三者の関係

上に見たように、美的クオリアのフレーゲ的（表象）内容は、ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態であり、したがって、美的クオリアはこうした関係様態を表象すると見なされるのであるが、ここに言う「経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態」は、

これを経験主体と知覚的クオリアとの間に成立する一種の関係性、端的に言うならば、経験主体と知覚的クオリアからなる二項関係として捉え返すことが可能となる（この点について上の[2]の①では、副詞節的な理解にもとづく「経験主体Sは知覚的クオリアpQをx的に感受する」という定式[adv.s.R(S,pQ)]のもとに指摘しておいた）。

一般に、ある心的状態MがR(a,b)というaとbからなる二項関係を表象するとは、「Mがa（aは個体定項）を表象し、かつ、Mがb（bは個体定項）を表象し、かつ、Mが二項関係R(x,y)（xとyはいずれも個体変項）を表象し、かつ、二項関係R(x,y)におけるxがaでありyがbであるということを表象する」ということを意味する。たとえば、ある心的状態M（「aはbより大きい（背が高い）」という信念）が二人の人物aとbに関して「aはbより大きい（背が高い）」ということを表象するとしたならば、それは「Mがaを表象し、かつ、Mがbを表象し、かつ、Mが「xはyより大きい」という関係R(x,y)を表象し、かつ、二項関係R(x,y)におけるxがaでありyがbであるということを表象する」ということを意味する。したがって、美的クオリアaQ（の感受という心的状態）が経験主体Sと知覚的クオリアpQとの関係の様態R(x,y)を表象するとしたならば、「美的クオリアaQは経験主体Sを表象し、かつ、美的クオリアaQは知覚的クオリアpQを表象し、かつ、美的クオリアaQは経験主体Sと知覚的クオリアpQとの関係の様態R(x,y)を表象し、かつ、美的クオリアaQは二項関係R(x,y)におけるxが経験主体Sでありyが知覚的クオリアpQであるということを表象する」ことになる。ここでとくに注目すべきは、上の連言命題は「美的クオリアaQは知覚的クオリアpQを表象する」という命題と「美的クオリアaQは経験主体Sを表象する」という命題とを論理必然的に含意する(entail)という点である。

それぞれの命題について、その含意点を確認しておくならば、以下のようになる。

まず「美的クオリアは知覚的クオリアを表象する」という命題の含意点についてであるが、美的クオリアが知覚的クオリアを表象するとしたならば、美的クオリアは知覚的クオリアに対して二階の関係(second-order relation)に立ち、まさにその意味で、美的クオリアはいわば「クオリアのクオリア」であると見なされることになる。

ついで「美的クオリアは経験主体を表象する」という命題の含意点について述べれば、美的クオリアが経験主体を表象するとしたならば、美的クオリアは知覚的クオリアを



感受している経験主体としての自己自身を感受したその感受内容に他ならないということを意味し、そのかぎりにおいて、美的クオリアの感受を一種の自己感受(自己享受)と解することも可能となる。

[4] 美的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義にもとづく理解は一種の投影主義と見なされるか

【TFRAQ】にその要点が示されている美的クオリアに関するフレーゲ的クオリア表象主義にもとづく理解は、一種の投影主義(projectivism)、すなわち或る知覚的クオリアをその経験主体が感受したその感受内容(これがその心的状態の内実をなす)を対象に投影することで、その感受内容を美的特性として対象に帰属する(たとえば、「赤さ」のクオリアをその経験主体が感受したその感受内容である「あざやかさ」のクオリアを対象としてのトマトに投影することによって、その「あざやかさ」のクオリアを「あざやかさ」という美的特性としてトマトに帰属する)ものと捉える向きもあるかもしれない。

しかしながら、【TFRAQ】に示されたフレーゲ的表象主義に依拠する美的クオリアに関する理解を文字通り取るならば、美的クオリアによって表象される経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態が対象に帰属される美的特性を規定するための条件となつて、その条件に合致する美的特性が選出されるのであって、或る知覚的クオリアをその経験主体が感受したその感受内容が対象に投影されることで、その感受内容が美的特性として対象に帰属されるのでもなければ、ましてやこの関係様態を表象する美的クオリア(という心的状態)が直接対象に「投影される」のでもないことから、美的クオリアに関するフレーゲ的表象主義にもとづく理解は、投影主義ではないと見なされることになる。

ただし、そうした仕方では選出された美的特性が、或る知覚的クオリアをその経験主体が感受したその感受内容という現象的特性、もしくは経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態を表象する美的クオリアという現象的特性と実質的に同じものであったとするならば、こうしたフレーゲ的表象主義的理解も投影主義の一種と見なされることになろう。しかしながら本稿では、美的特性は物理的特性か、傾性的特性か、原初的な特性か、はたまた心的特性かといった、美的特性の存在論的身分についてはあくまで中立的な立場を保持していることから、この点については未決定のままとどまることになる。

#### 4. クオリアと「われ感ずる故にわれ在り(sentio ergo sum)」

以上知覚的クオリアと美的クオリアとを表象的特性として捉えたうえで、フレーゲ的表象主義に依拠して両者について考察をおこなってきたのであるが、ついでここでは、知覚的クオリアと美的クオリアに関するこうしたフレーゲ的表象主義的な理解が潜在的に含意するところのものを顕在化することを狙って、「われ感ずる故にわれ在り」といった趣旨のN. ハンプリーの主張を取り上げ、これを知覚的クオリアと美的クオリアとに関する以上の議論との関連において捉え返す試みを示すことにしたい。

ハンプリーはその著『赤を見る』(2006)において、内なる世界の経験がその主体としての自己の存在の証となっている、換言するならば、感覚することによってはじめてその経験主体は自己の存在を実感をもって確証しようと主張するのであるが(Humphrey [2006]: 26-7)、このハンプリーの主張を本稿におけるクオリアをめぐる議論の論脈において捉え返すならば、それは、クオリアを感受することではじめてわれわれは自己の存在(すなわち自分が生きていること)を実感をもって確証しようということを意味することになる。デカルトの名句「われ惟うゆえにわれ在り(cogito ergo sum)」を振って言うならば、これはまさしく「われ感ずる故にわれ在り(sentio ergo sum)」という事態に他ならない。

「われ感ずる故にわれ在り」という標語のもとに捉えることができる、クオリアの感受をとおして可能となる自己の存在(すなわち自己の生)の確証について、前章第3節に示した知覚的クオリアと美的クオリアに関する理解をもとに、さらに敷衍して述べるならば以下ようになる。

##### [1] 知覚的クオリアの感受

まず知覚的クオリアの感受に関して言うならば、いま現に或る知覚的クオリアを感受している状況下で、反省の内観をとおして知覚的クオリアを感受している経験主体が他ならぬ「私」であることを覚知するとき、自己の存在が確証されることになるが、この自己確証の起点があくまで知覚的クオリアの感受にあることから、ここでは自己の存在は知覚的クオリアの感受によって裏打ちされたものとして、ある種の実感をもって確証されることになる。

一方で、前章第3節で論じたように、フレーゲ的表象主義にもとづくならば、知覚的クオリアのフレーゲ的(表象)内容は、「通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では



当該のクオリア経験を引き起こす特性」といった、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態ということになるが、こうした知覚的特性の呈示様態は自己のクオリア経験をとおして何らかの知覚的特性が外界に位置する対象に帰属されるために満たされなければならないその条件をなす。

この点に鑑みるならば、知覚的特性が対象に帰属されることで成立する、対象と知覚的特性からなる構成体が世界の構成要素をなすかぎりにおいて、他ならぬ「私」がある知覚的クオリアをいま現に感受しているという事態が延いては、世界の成立条件をなすと考えられることから、反省的内観をとおして自己がいま現にある知覚的クオリアを感受していることを覚知するとき、その覚知内容からの推論をとおして、自己と世界とが根源的に関係づけられていることが確認されることになる。まさにその意味で、知覚的クオリアの感受によって可能となる自己の存在の確認とは、「自分がいま現にこの世界に存在している」ということ(すなわちハイデッガー的な意味での「現存在(Dasein)」〔Heidegger [1979]: 11-5〕もしくは「世界-内-存在(In-der-Welt-sein)」〔Heidegger [1979]: 52-9〕)の確認に他ならないと言え、それをとおして根源的存在感情が引き起こされることになる。

## [2] 美的クオリアの感受

ついで美的クオリアの感受について述べるならば以下のようになる。

前章第3節で論じたように、美的クオリアのフレーゲ的(表象)内容、すなわち対象に帰属される美的特性を規定するための条件をなす、美的クオリアによる美的特性の呈示様態は、「ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態」であると言え、したがってフレーゲ的表象主義の理解によれば、美的クオリアは経験主体と知覚的クオリアとの間に成立するある特定の関係様態を表象することになるが、この点に鑑みるならば、反省的内観をとおして自己がいま現にある美的クオリアを感受していることを覚知するとき、その覚知内容からの推論をとおして、自己と世界とが根源的に関係づけられていることが確認されるばかりではなく、自己と世界とがいかなる仕方でも根源的に関係し合っているか、その関係のあり方(関係様態)が確認されることになると言える。すなわち、美的クオリア感受の覚知を起点とする推論をとおして自己がいま現にこの世界のなかでいかなる仕方でも存在しているか、その相存在

(Sosein) (より正確に言えば、その下位種としての「如何存在(Wiesein)」、すなわち「どのように存在しているか」) (see Meinong [1904]) が確認されることになるのである。

美的クオリアが自己と知覚的クオリアとの関係のあり方(すなわちその関係様態)それ自体を表象するという事態を別の角度から捉え返すならば、美的クオリアの感受とは、自己が感受している知覚的クオリアを享受する(あじわう)ことであると同時に、その知覚的クオリアを感受している自己自身を享受する(あじわう)こと、すなわち自己享受に他ならないと言える。

他方で、美的クオリア感受の覚知を起点とする推論をとおして自己と世界とがいかなるしかたでも根源的に関係づけられているか、そのあり方(関係様態)が確認されることになれば、自己と世界との関係様態の確認は自己がそのうちに置かれている世界そのものを超越することによってはじめて可能となることから、美的クオリアの感受にもとづく自己と世界との関係様態に関する確認はある種世界超越的な(world-transcendent)在り方を示すことになる

## 5. 結

以上本稿においては、知覚的クオリアと美的クオリアとを表象的特性として捉えたうえで、フレーゲ的表象主義に依拠して両者について考察をおこなうとともに(第3章)、「われ感ずる故にわれ在り(sentio ergo sum)」といった趣旨のN. ハンプリーの主張をひとつの手掛かりとして、フレーゲ的表象主義にもとづく知覚的クオリアと美的クオリアとに関する理解が含意するところのものを開展して示したのであるが(第4章)、ここであらためてこれまでの議論を総括するかたちでその要点を箇条書きに示すならば、以下のようになる。

- (1) 知覚的クオリアは、対象に帰属される知覚的特性を規定するための条件をなす、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態である、通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方でも当該の現象的经验を引き起こす特性を表象する。
- (2) 美的クオリアは、対象に帰属される美的特性を規定するための条件をなす、美的クオリアによる美的特性の呈示様態である、或る知覚的クオリアをその経験主体がどのよう



に感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態を表象する。

(3)美的クオリアは間接的な仕方では知覚的クオリアを表象するが、このことは美的クオリアは知覚的クオリアに対して二階の関係に立つ、別言するならば、美的クオリアはいわば「クオリアのクオリア」であるということを意味する。

(4)美的クオリアは間接的な仕方では経験主体を表象するが、このことは美的クオリアは知覚的クオリアを感受している経験主体としての自己自身を感受したその感受内容に他ならないということを意味し、そのかぎりにおいて、美的クオリアの感受を一種の自己感受(自己享受)として解することも可能となる。

(5)知覚的クオリアの感受をとおして、自己がいま現にこの世界に存在しているということ、すなわちその「現存在(Da-sein)」が確証されることになる。

(6)美的クオリアの感受をとおして、自己がいま現にこの世界のなかでいかなる仕方では存在しているか、その相存在(So-sein)(より精確には「如何存在(Wiessein)」)が確証されることになる。

(7)美的クオリアの感受にもとづく自己と世界との関係様態に関する確証は、ある種世界超越的(world-transcendent)な在り方を示す。

上にその要点を列挙した、フレーゲ的表象主義に依拠する知覚的クオリアと美的クオリアに関する考察を踏まえ、ここであらためて本稿の冒頭で言及した津上の「味」と「あじわい」に関する議論を取り上げ、それを本稿における論脈において捉え返す試みを示しておくことにしたい。

本稿第1章に指摘したように、津上は「あじわい」を「味」が意識的に深められたものと捉えるのであるが(津上[2010]: 14)、「味」と「あじわい」に関する津上のこうした理解はいかに解すべきであろうか。

「味」を知覚的クオリア一般のメタファーとして、また「あじわい」を美的クオリア一般のメタファーとして捉えるという本稿における基本方針のもとに、フレーゲ的表象主義に依拠する知覚的クオリアと美的クオリアに関するこれまでの議論と関連づけることで津上の理解を捉え返すならば、「味」が意識的に深められたものが「あじわい」であるとは、美的クオリアが或る知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態を表象するという事態を指すものと考えられる。すなわち「意識的に深める」とは、美的クオリアが

経験主体と知覚的クオリアとの或る特定の関係様態を表象する際にその介在が認められる、知覚的クオリアを経験する主体としての自己に対する反省的自己意識の作用を指すものと解されるのである。

本稿を締めくくるにあたり、最後にフレーゲ的表象主義に依拠する知覚的クオリアと美的クオリアに関する理解の持つ理論的可能性に一言触れておくならば、(すでに第3章第3節でも指摘しておいたように)フレーゲ的表象主義のもとに表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアを捉えることで、美的クオリアは知覚的クオリアおよび美的特性との関係において明確に位置づけられ、それによってそうした各種契機との関係性において美的クオリアの表象的特性としての在り方を解明することが可能となり、そのことが延いては、知覚的特性と美的特性のみならず、知覚的クオリアと美的クオリアをも射程に収めた包括的な美的経験理論の構築に向けて途を拓くことになるという点に、その理論的可能性の中心を認めることができるであろう。こうした理論的可能性を現実のものとするには、本稿ではあえて直接的に言及することを差し控えた、美的特性の存在論的身分に関する問題(すなわち、美的特性は物理的特性か、傾性的特性か、原初的な特性か、はたまた心的特性かという問題)をあらためて取り上げ、その究明をとおして美的クオリアと美的特性との関係についてさらに理解を深めることが必須の要件となるが、あらためて言うまでもなく、これこそまさにわれわれに課されたつぎなる課題に他ならない。



1. 「美的経験において問題となるクオリアが美的クオリアである」という理解のもとに美的クオリアについて定義の説明を試みると、仮に美的経験に関して美的クオリアから独立した定義的理解が示されないとするならば、「美的クオリアとは美的経験において問題となるクオリアであり、一方美的経験とは美的クオリアが問題となる経験である」という論理的循環を犯す恐れが生ずるが、これは、上記の理解があくまで導入のための暫定的規定であることに起因するものと言える。本稿第3章第3節ではフレーゲの表象主義の理論的枠組みにおいて「(自己が感受した)知覚的クオリアを(さらに一階上で)感受したその内容が美的クオリアである」という理解が示されるが、そこでは論理的循環の疑いは払拭されることになる。
2. 本稿では津上の表記法に倣って、「味」を漢字で、「あじわい」をひらがなで表記することにする(津上[2010]: 4)。
3. この点に関しては、本稿第5章「結」においてひとつの理解が示されることになる。
4. Cf. 松崎 [2013]: 107-8, 115-6.
5. 美的特性に関する階層構造理論のもとに捉えるならば、「あざやかさ」は一次的美的特性と見なされることから明らかに、本稿がその射程に収める美的特性は高階美的特性ではなく、あくまで一次的美的特性ということになる。なお、一次的美的特性と高階美的特性、および両者の関係については、松崎 [2010]を参照されたい。
6. “qualia”は複数形であり、その単数形は“quale”である。
7. センセデータについて詳しくはフィッシュ [2014]: 17-48を参照のこと。
8. したがってC. I. ルイスが理解したように、クオリアは、センセデータそれ自体のもつ特性であるということになる(Lewis [1929]: 121-53)。
9. クオリア表象主義に関する一般的理解が「クオリアは経験によって表象される、対象の具える特性に他ならない」というものであるのに対し(see Tye [2015]: 20, cf. 鈴木[2015]: 64-5, 信原幸弘編 [2017]: 103)、本稿におけるクオリア表象主義に関する理解は、あくまで「クオリアは対象の具える特性を表象する」というチャーマーズの理解に依拠するものであり、そのかぎりにおいて一般的理解とは決定的に異なる点はとくに銘記しておく必要がある。
10. したがって本稿におけるクオリアに関する理解は、2に挙げた「第一の理解(現象的性格としてのクオリア)」を基盤としながらも、①クオリアは経験のもつ現象的性格である、②クオリアは内観をととして接近可能である、というその二つの主張に加え、さらに③クオリアは表象的特性であるという第三の主張のもとにクオリアを捉える理解であるということになる。
11. 二つの特性PとQに関して、特性Pが特性Qを含意し(entail)(すなわち、特性Pをもつものはすべて必然的に特性Qをもち)、かつ特性Qが特性Pを含意する(すなわち、特性Qをもつものはすべて必然的に特性Pをもつ)とするならば、その場合にかぎり特性Pと特性Qとは等価(equivalent)であるということになる(see Chalmers [2010a]: 343)。なお、「等価性(equivalence)」と「同一性(identity)」との異同については、Chalm-

ers [2010a]: 343, 343.n.4を参照されたい。

12. ここに言う「表象的特性」とは、あくまで何らかの対象を表象する特性を意味するものであって、この「表象的特性」によって「表象された特性」が意味されているわけでは断じてないという点は、とくに銘記しておく必要がある。したがって、ここに言う「表象的特性」を(たとえば「物理的な赤」、すなわち、赤の現象的経験の原因となる物体表面のもつある特定の分光反射特性のような)「(対象のもつ)何らかの表象された外的特性(certain represented external properties)」と混同することがあってはならない。仮に現象的特性を「(対象のもつ)何らかの表象された外的特性」を同一視するとしたならば、現象的特性が本来経験主体もしくは経験主体のもつ心的状態が具える特性であるのに対し、「(対象のもつ)何らかの表象された外的特性」はそうではないことから、そうした同一視は一種のカテゴリミステイクを犯すことになる(see Chalmers [2010a]: 342)。
13. 厳密に言うならば、これは「純粋な表象的特性(pure representational properties)」についての理解ということになるが、ここでは「純粋な表象的特性」と「不純な表象的特性(impure representational properties)」との差異については不問に付し、「純粋な表象的特性」の理解をもって表象的特性一般の理解とする。なお「純粋な表象的特性」と「不純な表象的特性」に関して詳しくは、Chalmers [2010a]: 341-2を参照されたい。
14. あらためて言うまでもなく、テーゼ【TRQ】はそのまま知覚的クオリアと美的クオリアについても当てはまる。
15. Thompson [2006]によれば、ラッセルの表象主義論者としてはTye [1995], Dretske [1995], Harman [1990], Lycan [1996], Clark [2000], Drooge [2003], Jackson [2003]が挙げられる(Thompson [2006]: 1)。
16. この種の表象主義がなぜ「ラッセル的」と形容されるのかという点について、チャーマーズは「すべての内容をこのようなもの[世界の内にいる或る特定の対象と特性からなる複合体、もしくは或る特定の特性]と考えたラッセルにしたがって」(Chalmers [2010a]: 356, なお〔 〕内は松崎による補筆)と述べるにとどまり、その典拠となるラッセルの著作を具体的に挙げることはないが、少なくともその典拠のひとつに目されるのは、ラッセルの『論理的原子論の哲学』(1918)、とくに「個物、述語、関係」と題されたその第2章であると考えられる。本章でラッセルはいわゆる「原子的事実(atomic facts)」について論ずるのであるが、そこには以下のような記述が認められる。

考えられるかぎりもつとも単純な事実は、「これは白い」といったような、ある個物(some particular thing)がひとつの性質(a quality)をもつことからなる事実である。(Russell [1918/2010]: 26)

あらためて言うまでもなく、ここに挙げられた個物と性質からなる原子的事実こそまさに「ラッセル的(表象)内容」に他ならない。

17. 本稿で問題とする知覚的クオリア(e.g.「赤さ」のクオリア)や美的クオリア(e.g.「あざやかさ」のクオリア)に関して言うならば、そのラッセル的(表象)内容は、「世界の内にいる或る特定の対



象と特性からなる複合体」ではなく、あくまで「或る特定の特性」、すなわち知覚的特性や美的特性ということになる。

18. ここで、美的クオリアが美的特性を表象することとおしてその美的特性を帰属する先は、対象ではなく、知覚的特性ではないかとの疑義が呈されるかもしれない。たとえば「あざやかさ」という美的クオリアが表象する「あざやかさ」という美的特性は、あくまで「赤さ」という色彩知覚的特性に帰属されるのであって、トマトという対象に帰属されるのではないというわけである(美的特性が対象にではなく知覚的特性に帰属されるとするならば、美的特性[「あざやかさ」]は知覚的特性[「赤さ」]に対して二階の関係に立つと見なされることになる)。

しかしながら、仮に広義での知覚的特性が(狭義での)知覚的特性と美的特性からなるものと解するならば、(狭義での)知覚的特性[「赤さ」]と美的特性[「あざやかさ」]は、同じひとつの広義での知覚的特性(「あざやかな赤」／「赤のあざやかさ」)のもつ二つのアスペクトとして捉えることも可能となる(see 松崎 [2015])。そうした理解のもとでは、広義での知覚的特性が対象に帰属されるかぎりにおいて、広義での知覚的特性のもつ一方のアスペクトをなす美的特性もまた、対象に帰属されると見なされることになる(「そのトマトはあざやかな赤さをもっている」)。

本稿ではこうした理解のもとに、美的クオリアが美的特性を表象することとおしてその美的特性を帰属する先は、知覚的特性ではなく、あくまで対象であると解することにする。

19. 因みに、こうしたラッセルの表象主義の問題は美的クオリアには当てはまらない。なぜなら、そこにおいて美的クオリアが問題になる可能世界であるとするならば、それがいかなる可能世界であろうと、その世界ではすべての美的クオリア経験はそれに対応する美的特性を対象に帰属することになるからである。すなわち、可能世界 $w_1$ (これを現実世界と解することもできよう)における経験主体Aと可能世界 $w_2$ における経験主体Bとの両者が同一の美的クオリア経験をもつとするならば、両者はそのクオリア経験をとおしてそれに対応する同一の美的特性を対象に帰属することになるのである。したがってここでは、「現象的に同一の真なる美的クオリア経験は対象に同一の内在的美的特性を帰属しうる」ことになる。

美的クオリアに関してはラッセルの表象主義の問題が端から問題となりえないのは、そもそも美的特性と何らかの物理的特性との間に(法則的)必然的關係が認められないとの理由による(端的に言うならば、美的特性に関してたとえば「物理的あざやかさ」といった特性は存在しないのである)。

20. ラッセルの表象主義の蔵する根本問題を析出するための論証としてChalmers [2010b]では、「同一の内在的的特性を具えた対象に関する同一の現象的经验(クオリア経験)が場合によっては真とも偽ともなりうる」ことをその要諦とする、Chalmers [2010a]とはまた異なった方式のものが採用されているが(Chalmers [2010b]: 388-90)、その論証方式においてもまたChalmers [2010a]と同種の可能世界に依拠して議論が展開されるとともに、色彩経験をとおして対象に帰属される非関係的特性の候補としてもっとも蓋然性の高いものとして物体の具える表面反射特性という内在的物理的特性が挙げられている点

で(Chalmers [2010b]:390)、両者の論証間にある一定の共通性が認められる。

21. フレーゲの表象主義は何もチャーメーズの専売特許というわけではなく、たとえばトンプソンもまたThompson [2003], Thompson [2006], Thompson [2009]においてフレーゲの表象主義を採っている。
22. フレーゲの表象主義に関する後段での議論を先取りして、フレーゲの表象主義がラッセルの表象主義の必然的に蔵する問題を回避しうることを、本章第2節においてChalmers [2010a]における論証を説明するために用いた、物理的赤を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす現実世界と物理的緑を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす可能世界をもとに確認しておくならば以下のようなになる(Chalmers [2010a]: 365-6)。

フレーゲの表象主義によれば、「赤」のクオリアは通常の諸条件のもとで大抵の場合知覚的な仕方では「赤」のクオリア経験を引き起こす特性を表象することになるため、物理的赤を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす現実世界と、物理的緑を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす可能世界のいずれにおいても、「赤」のクオリアの表象内容は「大抵の場合知覚的な仕方では「赤」のクオリア経験を引き起こす特性」であるということになるが、この表象内容が対象に帰属される色彩知覚的特性を規定するための条件となつて、「赤さ」という色彩知覚特性が対象に帰属されることになるため、現実世界と可能世界との二つの世界に跨る上記のようなケースにおいても、フレーゲの表象主義のもとでは「現象的に同一の色彩経験は同じ特性を対象に帰属させる」という表象主義一般を可能とする基本的制約はそのまま保持されることになる(see Chalmers [2010b]: 391)。(とはいえ、仮に物理主義的表象主義に依拠するとしたならば、物理的赤を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす現実世界では、「赤」のクオリアの表象内容である「大抵の場合知覚的な仕方では「赤」のクオリア経験を引き起こす特性」という条件のもとに対象に帰属される「赤さ」という色彩知覚的特性として、具体的には、物理的赤が選出されるのに対して、物理的緑を具えた対象が「赤」のクオリア経験を引き起こす可能世界においては物理的緑が選出されるといったように、対象に帰属される内在的特性はそれぞれの場合で異なることになる。see Chalmers [2010a]: 365)

23. 還元的表象主義と非還元的表象主義に関する定義的理解に関しては、Chalmers [2010a]: 350を参照されたい。
24. チャーメーズによれば、概念をある種の心的事象として捉えることも可能となるが、チャーメーズのこうした理解にしたがうならば、概念の外延は心的事象が表象するラッセル的(表象)内容に直接対応するものと解されることになる(see Chalmers [2010a]: 356)。
25. 美的クオリアのフレーゲ的(表象)内容である「ある知覚的クオリアをその経験主体がどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとのある特定の関係様態」は、基本的に、価値的成分と質的(記述的)成分との二種のものからなると考えられる。
26. 【TFRAQ】に関しても、本章第2節で指摘した、ラッセルの表象



主義のもとでの美的クオリアに関する理解におけると同様、美的特性が帰属される先は対象それ自体ではなく、知覚的特性なのではないか(たとえば「あざやかさ」という美的特性が帰属されるのはトマトという対象それ自体ではなく、「トマトのもつ」「赤さ」という色彩知覚的特性なのではないか)という疑義が呈されることであろうが、この疑義に対しては、註18に示したのと基本的に同様の仕方で応ずることにしたい。

27. ここでは「①「あざやかさ」という美的クオリアは、対象に帰属される②「あざやかさ」という美的特性を規定するための条件をなす、③「あざやかさ」という美的クオリアによる④「あざやかさ」という美的特性の呈示様態である、「赤」のクオリアをその経験主体が⑤「あざやかさ」として感受するという、経験主体と「赤」のクオリアとの間に認められるある特定の関係様態を表象する特性である、フレーゲ的表象的特性と等価である」といったように、「あざやかさ」という同じ語が繰り返し現れるが、その意味するところはそれぞれまったく異なるものである点は注意を要する。

この点について具体的に述べるならば、①と③の「あざやかさ」が(心的状態としての)ある特定の美的クオリアを意味するのに対し、②と④の「あざやかさ」は(対象のもつ)ある特定の美的特性を意味し、また⑤の「あざやかさ」は経験主体が赤のクオリアをどのように感受しているかその感受様態、すなわち経験主体と赤のクオリアとの間に認められるある特定の関係様態を意味しているのである。

28. ここでチャーメーズの言う“phenomenal notion”は、“phenomenal concept”と基本的に同義の用語であると考えられる。なお、“phenomenal concept”の主要な特徴については山口[2012]: 132-3、鈴木[2015]: 50-6を参照されたい。
29. 知覚の副詞説一般に関しては、フィッシュ [2014]: 49-73およびCrane and Craig [2015]: 25-8を参照されたい。

#### 参考文献

- Block, Ned. [1990]. “Inverted Earth.” *Philosophical Perspectives* 4: 52-79.
- Chalmers, David J. [2010]. *The Character of Consciousness*. Oxford: Oxford University Press(デイヴィッド・J.チャーメーズ『意識の諸相』(上・下)太田紘史他訳、春秋社、2016年)。
- . [2010a]. “The Representational Character of Experience.” In: Chalmers [2010]: 339-79.
- . [2010b]. “Perception and the Fall from Eden.” In: Chalmers [2010]: 381-454.
- Clark, Austin. [2000]. *A Theory of Sentience*. Oxford: Oxford University Press.
- Crane, Tim and French, Craig. [2015]. “The Problem of Perception.” Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2017 Edition). URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/spr2017/entries/perception-problem/>>.
- Dennett, Daniel C. [1988]. “Quining Qualia.” In: *Consciousness in Contemporary Science*. Edited by A. Marcel and E. Bisiach. Oxford: Oxford University Press, 43-77.
- . [1991]. *Consciousness Explained*. Boston: Little Brown(ダニエル・C.デネット『解明される意識』山口泰司訳、青土社、1998年)。
- Dretske, Fred. [1995]. *Naturalizing the Mind*. Cambridge, MA: MIT Press(フレッド・ドレッツキ『心を自然化する』鈴木貴之訳、勁草書房、2007年)。
- Droege, Paula. [2003]. *Caging the Beast: A Theory of Sensory Consciousness*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Frege, Gottlob. [1892]. “Über Sinn und Bedeutung.” *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, NF100:25-50.
- Goldman, Alan H. [1993]. “Realism About Aesthetic Properties.” *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 51: 31-7.
- . [2009]. “Aesthetic Properties.” In: *A Companion to Aesthetics*. 2nd edn. Edited by Stephen Davies et al. Oxford: Wiley-Blackwell, 124-8.
- Harman, Gilbert. [1990]. “The Intrinsic Quality of Experience.” *Philosophical Perspectives* 4: 31-52(G. ハーマン「経験の内在的性質」鈴木貴之訳、信原幸弘編『シリーズ心の哲学Ⅲ 翻訳編』勁草書房、2004年、85-120)。
- Heidegger, Martin. [1979]. *Sein und Zeit*. 15te, an Hand der Gesamtausgabe durchgesehene Auflage mit der Randbemerkungen aus dem Handexemplar des Autors im Anhang. Tübingen: Max Niemeyer.
- Humphrey, Nicholas. [2006]. *Seeing Red: A Study in Consciousness*. Cambridge: Harvard University Press(ニコラス・ハンフリー『赤を見る—感覚の進化と意識の存在理由』柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2006年)。
- Jackson, Frank. [2003]. “Narrow Content and Representation—or Twin Earth Revisited.” *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association* 77 (2): 55-70.
- Lewis, Clarence Irving. [1929]. *Mind and the World-Order: Outline of a Theory of Knowledge*. New York: Charles Scribner's Sons.
- Lycan, William . [1996]. “Layered Perceptual Representation.” *Philosophical Issues* 7: 81-100.
- Meinong, Alexius (ed.). [1904]. *Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie*. Leipzig: Verlag von Johann Ambrosius Barth.
- Nagel, Thomas. [1974]. “What is it like to be a bat?” *Philosophical Review* 83 (October): 435-50.
- Peacocke, Christopher. [1983]. *Sense and Content: Experience, Thought, and their Relations*. Oxford: Oxford University Press.
- Russell, Bertrand. [1918/2010]. *The Philosophy of Logical Atomism*. London / New York: Routledge, 2010(バートランド・ラッセル『論理的原子論の哲学』高村夏輝訳、ちくま学芸文庫、2007年)。



- 
- Thompson, Brad J. [2003]. "The Nature of Phenomenal Content." PhD diss. University of Arizona. URL = <[http://arizona.openrepository.com/arizona/bitstream/10150/289959/1/azu\\_td\\_3107047\\_sip1\\_m.pdf](http://arizona.openrepository.com/arizona/bitstream/10150/289959/1/azu_td_3107047_sip1_m.pdf)>.
- . [2006]. "Colour Constancy and Russellian Representationalism." *Australasian Journal of Philosophy* 84-1: 75-94.
- . [2009]. "Senses for Senses." *Australasian Journal of Philosophy* 87-1: 99-117.
- Tye, Michael. [1995]. *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: MIT Press.
- . [2015]. "Qualia." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2015 Edition). URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2015/entries/qualia/>>.
- 鈴木貴之. [2015]. 『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感ずるのだろうか—意識のハード・プロブレムに挑む』勁草書房。
- 津上英輔. [2010]. 『あじわいの構造—感性化時代の美学』春秋社。
- 信原幸弘編. [2017]. 『心の哲学—新時代の心の科学をめぐる哲学の問い』新曜社。
- フィッシュ、ウィリアム. [2014]. 『知覚の哲学入門』山田圭一監訳（原著2010年）、勁草書房。
- 松崎俊之. [2010]. 「美的特性に関する階層構造理論」、『芸術文化』第15号、11-32頁。
- . [2013]. 「知覚的特性と美的特性との関係に関する一考察」、『石巻専修大学 研究紀要』第24号、105-25頁。
- . [2015]. 「知覚的特性、感覚的特性、美的特性—N. ハンフリーの進化心理学的仮説に依拠して」、『芸術文化』第19号、69-87頁。
- 山口尚. [2012]. 『クオリアの哲学と知識論証—メアリーが知ったこと』春秋社。

本稿は、第68回美学会全国大会における同一論題による研究発表（2017年10月7日、於國學院大学）にもとづく。